

Vol. 157

2017.6.20

理事長トーク Top Interview

第12回 チーム医療症例検討会 in 花川

医療法人社団 健育会 理事長 竹川節男



北海道らしい清々しい青空が広がった2017年6月17日(土)、「第12回 チーム医療症例検討会」が花川病院に隣接した「花川南コミュニティセンター」にて行われました。



「チーム医療症例検討会」は様々な研修会を行なっている健育会の中で、もっとも歴史が古い研修会となっています。幹事は毎年、病院の持ち回りで行っており、12回目の今年には花川病院が幹事となり開催されました。今回は各病院・施設から約160名の職員が花川に集いました。

まずはじめに私から、参加している職員に向けて、開会の挨拶として以下のような話をしました。

「本日は、市立函館病院リハビリテーション科 科長 リハビリテーションセンター長の長谷川千恵子先生に、『院内から地域に拡げる嚙下リハビリテーション』という演題で教育講演を賜ります。チーム症例検討会では、介護施設9題、医療8題の全17題が発表されます。いずれも私自身が各病院・施設から上がってくる候補をみて、卓越したチームワークによって成し得た事例であると感じ、選出した症例であり、その成功体験をグループ内で共有し、さらに広めていくことがこのチーム症例検討会の目的です。介護施設の症例発表は「キラキラ介護賞」を受賞した症例になります。「キラキラ介護賞」は、健育会グループの介護施設を利用する皆さんが、その人らしくキラキラと輝いている、そういった支援ができている事例に送る賞です。また、病院の症例発表は、「ミラクル賞」を受賞した症例になります。「ミラクル賞」は、チーム医療の実践により、現代の医学の常識を超えて奇跡の回復を成し得た症例に送る賞です。今回のチーム医療症例検討会の開催にあたって改めて抄録を読みますと、それぞれの病院・施設の特徴が見えてくると感じました。そのような意味で、今日の発表を楽しく聞かせていただきますので、頑張ってください。」



その後、市立函館病院リハビリテーション科 科長 リハビリテーションセンター長の長谷川千恵子先生に教育講演を賜りました。



15年間にわたる摂食嚥下に関する函館での長谷川先生の取り組みの歩み、そして病院から地域へとその取り組みの輪を広げ、摂食・嚥下の分野の教育と普及に努めていらっしゃることは、素晴らしいことだと感じました。

健育会グループにおいても、誤嚥性肺炎の発症頻度を減らし、適切な栄養摂取方法を確立させることで、口から食べる楽しみも継続できるようにする摂食・嚥下のリハビリテーションに積極的に取り組んでいます。今回の長谷川先生のお話からさらに知見を広げ、それぞれの病院施設での取り組みに結びつけてほしいと考えています。

症例検討会では、「介護の部」9題、「医療の部」8題の全17題が発表されました。



「介護の部」の発表後、座長を務められた元淑徳大学短期大学部 健康福祉学科学科長・特任教授 亀山 幸吉先生からは、今回の発表を聞いての講評（抜粋）として、「難病中の難病と言われるALS等、大変重い障害の方々への事例がほとんどでありました。そのようなご利用者に対して、生活支援・自立支援などチームでの実践を試みられ、単なる集団的アプローチではなく、専門性を活かしたアプローチが行われているご発表がありました。リハビリテーション医学で著名な上田 敏先生は、'リハビリは、全人間的復権'であるといわれています。現在話し合いが進んでいる介護福祉法の改正点も、リハビリを非常に重視する方向で検討がされているようです。そういう観点において、健育会の今日のご発表は大変先駆的な事例であったと言えます。大変貴重なご発表、熱心なご助言をありがとうございました。」との講評をいただきました。



「医療の部」の座長を務められた花川病院院長の憲 克彦先生からは、すべての演題に対して一言ずつ丁寧なコメントをいただいたのち、「今後もグループ内で取り組みを広げ、学び合いを進めていただきたく思います。本日は貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました」との講評をいただきました。



症例発表会の後は、花川病院に隣接する介護老人保健施設オアシス21にて懇親会が行われました。はじめにジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグBリーグに所属するレバンガ北海道専属のチアダンスチーム「パシスタスピリッツ」によるパフォーマンスがあり、華やかに会場を盛り上げました。その後、レバンガ北海道の折茂武彦代表兼選手から一言いただき、懇親会がスタートしました。



乾杯のご挨拶は 東邦大学医学部教授 長谷川 友紀先生からいただきました。乾杯のご発声の前には講評として、「医療では未来を、そして介護ではキラキラと光り輝く毎日を目指しておられるわけですが、医療と介護で共通しているものは何かということをお話いただきました。そして感じたのは、皆様のご発表に共通しているのは、「ストーリー」だと感じました。「ストーリー」とは、患者さん・ご利用者一人一人の人生を大切に、どのように共に作っていくのか、またそれぞれの患者さん・ご利用者の生活環境や思想、考え方をうまく抽出してその実現のためにどのように行動していくのかということでした。その点において医療と介護は繋がるのだと感じました。皆さんが切磋琢磨して、このように色々なチームが色々な考え方で取り組みを進めることは大変素晴らしいことだと思います。来年、更に高いレベルでの発表を伺えることを楽しみにしています。」とお話をいただきました。



食事については、花川病院・オアシス21・花ぴりかの3名の調理長が腕をふるって作った、地元の幸を使ったこだわり料理が並び、どれもとても美味しく、また職員たちの対応も素晴らしく、大変楽しい時間となりました。会場にも理念ビデオから抜粋した言葉とそのシーンのパネルが飾られていたり、レバンガ北海道の展示があったり、料理の鉄人風に調理長が紹介されていたりするなど、随所に参加者に楽しんでもらおうとする工夫が見られました。



また、チーム医療症例検討会に合わせて花川病院の夏の制服のリニューアルも行われて、石川マネージングディレクターよりその色と模様の説明がありました。色は病院のイメージカラーである黄緑色とし、アイヌの伝統的な文様を描くデザイナーさんによってデザインされた「雪の華」が描かれています。「雪の華」は7つのクライアントに見立てて7個描かれ、また小さなドットは関わる人の笑顔を示しているということです。花川らしいこだわりのデザインとなったのではないかと思います。



今回、病院 隣接施設での研修会開催、施設内での懇親会と、喬成会の皆さんは準備からとても大変だったと思いますが、円滑な運営ができており、大変感心しました。



美味しい食事を楽しんだ後、会の終わりには、花川病院の院長 憲先生から、来年の幹事である西伊豆健育会病院の院長 仲田先生に恒例の鍵の受け渡しが行われ、今年のチーム医療症例検討会は終了いたしました。



今回の第12回チーム医療症例検討会で私が特に注目したのは発表者の職種です。医師、看護師、介護福祉士、理学療法士、作業療法士、ケアワーカーと多職種に渡り、全ての職種が関わるチーム医療の広がりを感じることができました。また、ケアポート板橋からは、EPA介護福祉士のトレド・マリィゼル・クルズさんが発表を行いました。彼女はEPA介護福祉士候補として平成23年にフィリピンから来日し、介護福祉士取得後も引き続きケアポート板橋で働いています。外国人看護師・介護福祉士の活躍が、このようにチーム医療の中心となるまでに至った事は、大変素晴らしいと感じました。

今回、「第12回 チーム医療症例検討会」に参加した職員は、自分の働く病院・施設にてチーム医療症例検討会での学びをしっかりと他の職員に伝え、日々の取り組みの中に活かしてください。そうしてグループ全体でしっかりと高め合うことで、来年西伊豆健育会病院が幹事として行われる「第13回チーム医療症例検討会」では、さらなる進化を期待しています。

